

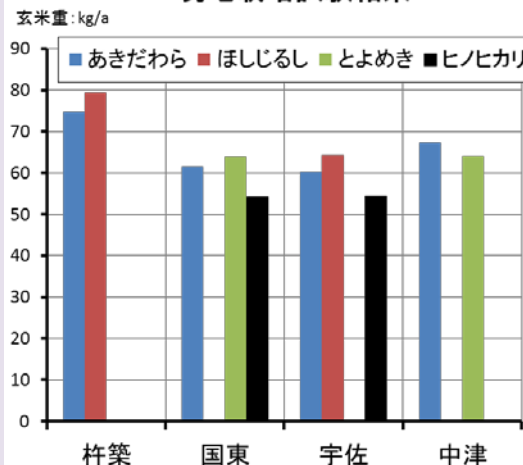
【全体概要】

本県低標高地域は「ヒノヒカリ」一極集中状態であり、作業の集中による収量・品質低下や気象災害リスクにさらされている。そこで、「ヒノヒカリ」と作期の異なる多収性品種の特性把握を行い、業務用需要に対してのロット面や価格面において安定的な取引の体制確立を図る。

新品種・新技術等の概要

多収性早生品種:「あきだわら」「ほしじるし」とよめき」
(いずれもヒノヒカリより1～2週間
程度早生)

現地栽培試験結果



主な取組内容

①現地実証ほにおける品種比較

- ・県内4か所に現地実証ほ、および県農試において4品種の比較検討を行った。

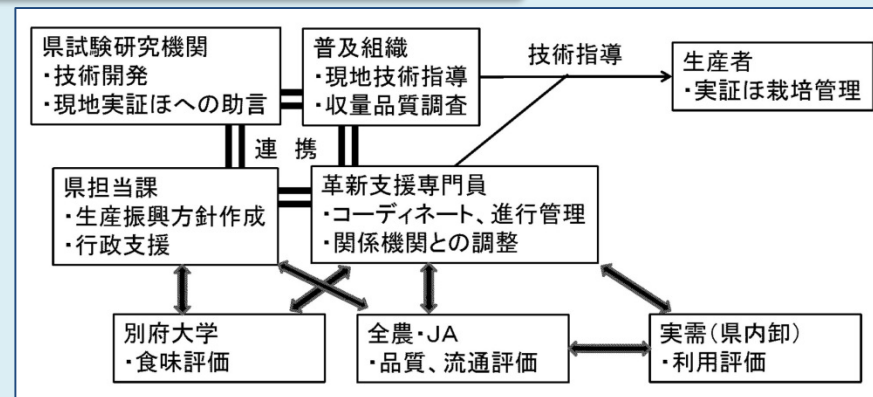
②生産物の品質・食味評価

- ・大学及び専門機関に委託し、食味官能評価を実施した。

③実需・流通事業者を交えた検討会の開催

- ・現地実証ほでの中間検討会、および成績検討による関係機関の意識統一を行った。
- ・関係者で先進地調査を行い、優良地域の情報収集を行った。

コンソーシアム候補の体制図



実績と今後の展開

【実績】

- ・ヒノヒカリと作期の異なる4品種について、試験場・現地レベルで栽培性の比較検討と食味分析・流通評価を行い、主力品種として2品種に絞り込んだ(早生:あきだわら、晩生:たちはるか)。
- ・2カ年の試験研究結果を踏まえ、生産者向けの栽培暦を作成した。
- ・業務用多収性品種の位置づけを明確にし、JAと特定生産者の契約栽培を核とした安定的な生産・供給体制を確立するとともに、全農と実需間の早期契約による安定流通を行う仕組みを構築した。

【今後の展開方向】

- ・業務用多収性品種の収量性安定・向上を目的とした専用一発肥料の開発・普及を図る(令和元年度実証試験を実施)。
- ・関係機関と連携した業務用多収性品種の栽培・流通・販売を引き続き推進し、大分県産米の新たな需要確保を図る。